

-大学院歯学独立研究科-

第 80 回 大学院 研究科 発表会 プログラム
第 98 回 中間 発表会 プログラム

大学院学生等が、これまでの研究成果を発表します。
どなたでも聴講できますので、多数の参加をお待ちしております (聴講申込不要)

場 所：実習館 2 階 総合歯科医学研究所セミナー室

日 時：2018 年 11 月 28 日 (水) 17 時 25 分 開会

-2018 年 11 月 28 日 (水) -

No.	発表区分・予定時間	演題名・発表者	審査委員
	17:25	開会挨拶 高橋研究科長	
1	[中間発表] 17:30~18:00 司会:影山 准教授	「矯正治療患者における顎顔面軟組織の三次元解析」 荻原美希 3年 硬組織疾患制御再建学講座 臨床病態評価学	主査:田口教授 副査:羽鳥教授 :小林教授
2	[大学院発表] 18:00~18:30 司会:吉成 教授	「歯周組織の状態とフレイル、ソーシャルキャピタルの関連性に関する疫学研究」 杉江美穂 4年 健康増進口腔科学講座 口腔健康分析学	主査:増田教授 副査:音琴教授 :中村准教授

発表内容の要旨(課程博士)
Abstract of Presented Research (For the Doctoral Course)

学籍番号 Student ID No.	ID#G 1601	入学年 Entrance Year	2015	3年 Year
氏名 Name in Full	荻原 美希			
専攻分野 Major Field	臨床病態評価学			
主指導教員 Chief Academic Advisor	影山 徹			
発表会区分 Type of Meeting	中間発表会 ・ 大学院研究科発表会 ・ 松本歯科大学学会 Midterm Meeting / Graduate school research meeting presentation / The Matsumoto Dental University Society			
演題名 / Title of Presentation				
矯正治療患者における顎顔面軟組織の三次元解析				
発表要旨 / Abstract				
<p>矯正治療では、咬合および口元を主とした顔貌の改善が行われる。静的および動的な顔貌の動きは、これまでも二次元的に解析され報告されてきたが、三次元的な解析を行った報告は少ない。そこで本研究では、客観的な顔面軟組織の審美評価指標を考察するために、正常咬合者のスマイル時の口唇の動きについて三次元解析ソフトウェアを用いて検討した。</p> <p>資料は本研究に同意の得られた正常咬合者 34 名(男性 23 名、女性 11 名)を対象とした。頭部固定は行わず、閉唇時と posed smile 時および full smile 時のステレオ画像を撮影し、三次元解析ソフトウェア(QM3000)を用いて、顔貌写真を立体構築した。上下口唇中央部、左右口角部、左右頬部における閉唇時と posed smile 時および full smile 時の動きについて、ステレオ画像計測法を用いて三次元的に解析した。軟組織変化量は、水平方向では左側への移動をプラス(+)、垂直方向では上方への移動をプラス(+)、前後方向は前方への移動をプラス(+)と定義した。各座標データを集計し、統計処理を行った。</p> <p>閉唇時と smile 時の比較において、頬部は上外側および前方に移動した。口唇上部の移動方向は上後方に、下唇中央部は下後方に、口角部は上外側および後方に移動し、口角の移動の差が最も大きかった。男女の比較では、posed smile 時と full smile 時の水平方向の頬部および posed smile 時の垂直方向の下唇中央部に有意差を認めた。Posed smile 時と full smile 時の比較では、女性群は水平方向の左右口角部に有意差を認め、垂直方向および前後方向では有意差は認めなかった。男性群では、下唇中央を除く水平方向および垂直方向で有意差を認め、full smile 時で水平および垂直方向に関わる顔面表情筋の運動が変化した。Posed smile は「感情に関わらない学習された自発的な笑顔で、高い再現性」が報告されている。女性においては、日常的に顔や表情を意識する機会が男性よりも多いと推測されることから、本研究における posed smile 時と full smile 時の垂直方向で有意差が認められなかったと考えられた。以上の結果から、正常咬合者の posed smile と full smile では、男女で異なる口唇の運動を示すことが示唆された。</p>				

発表内容の要旨(課程博士)
Abstract of Presented Research (For the Doctoral Course)

学籍番号 Student ID No.	ID# G G1505	入学年 Entrance Year	2015 年 Year
氏名 Name in Full	杉江 美穂		
専攻分野 Major Field	健康増進口腔科学講座口腔健康分析学		
主指導教員 Chief Academic Advisor	吉成 伸夫		
発表会区分 Type of Meeting	中間発表会 ・ 大学院研究科発表会 ・ 松本歯科大学学会 Midterm Meeting / Graduate school research meeting presentation /The Matsumoto Dental University Society		
演題名 / Title of Presentation			
歯周組織の状態とフレイル、ソーシャルキャピタルの関連性に関する疫学研究 Epidemiological study on the relationship between the condition of periodontal tissue and frailty and social capital.			
発表要旨 / Abstract			
<p>【目的】 近年、老年医学会では高齢者における脆弱な状態、すなわち要介護状態に陥る前段階である、意図しない衰弱、筋力、活動性、認知機能、精神活動の低下した状態を「フレイル(虚弱)」と呼ぶことを提唱し、要介護状態となる前に予防策を講じるように呼びかけている。本研究では歯周組織の健康状態とフレイル、ソーシャルキャピタルとの関連性を検討することを通して、歯周組織の健康状態が健康寿命に影響するか否かを解明することを目的とする。</p> <p>【方法】 対象は松本歯科大学病院総合口腔診療部に来院した歯周病患者のうち、口頭と文書で研究計画を説明し、研究に参加することの同意が本人から得られた者であった。研究対象者は、73名で、再評価検査時に口腔内検査(現在歯数、アイヒナーの分類、Probing Depth、Clinical Attachment Level、Bleeding on Probing、Community Periodontal Index、Plaque Index)を施行した。フレイルの評価は、H.Simada の分類(2013. JAMDA)を使用して歩行測定、握力測定、忍耐力、身体活動、栄養の5項目について評価し、3つ以上の要素において基準値以下となった場合フレイルと判定した。得られた歯周組織所見とフレイル、ソーシャルキャピタル項目について単相関にて傾向を確認し、その後二項 logistic にて検討した。統計学的解析には SPSS(ver. 24, IBM Corporation, NY, USA)を使用した。</p> <p>【結果】 フレイル基準の3は1名、2は4名、1は25名であり、フレイルと判定されるものはいなかった。そこで、フレイル評価の3以下の被験者をプレフレイルと定義し、各所見について単相関を施行した。現在歯数とソーシャルキャピタル項目の「口腔の健康」と歯周組織所見に有意性が認められたため、プレフレイルを従属変数に、年齢、性別、現在歯数、PD 平均、CAL 平均、歯肉退縮量平均を独立変数にして、「口腔の健康」との関連を二項 logistic にて検討した。その結果、現在歯数が1歯増加することにより、プレフレイルリスクは13%増加(オッズ比: 1.13)(P=0.043)、「口腔の健康」がひどいと感じた場合、プレフレイルは759%増加傾向(オッズ比: 8.59)(P=0.064)であった。この際の感度、特異度、陽性予測率、陰性予測率、正確度、LR(+), LR(-), NND(何人を診断すれば1名の真のプレフレイルを探せるか)は、64.3%(95%CI, 51.4-82.6)、66.0%(60.0-70.9)、33.3%(21.4-42.8)、87.5%(79.5-93.9)、65.7%(56.1-73.3)、1.89(1.03-2.83)、0.54(0.25-0.98)、3.30(1.87-74.10)であった。すなわち、約3名をスクリーニングすれば、1名のプレフレイルを見つけ出すことができるという結果であった。</p> <p>【考察】 研究開始前の作業仮説としては、歯周組織の状態が悪化するにつれて、フレイル、ソーシャルキャピタルの状態も悪化していき、歯周組織の健康が健康寿命の延伸に貢献するというものであったが、意に反して、プレフレイル状態と歯周組織所見では相関関係が認められないばかりか、現在歯数が増加すると、プレフレイルの状態も悪化するという結果であった。研究における被験者は大学病院に通院する患者で、現在歯数が少なくても、現時点では治療意欲のあるモチベーションの高い集団である。よって、フレイルの診査項目である忍耐、身体活動、栄養が向上している可能性があるためプレフレイル度が低下したのかもしれない。ただ、口腔環境に不安を感じているとプレフレイルも悪化するという傾向にあり、今後被験者数を増やして統計学的パワーを得る必要がある。他研究において現在歯数の増加とフレイル罹患率の減少、重度歯周炎患者のフレイル罹患率の増加が報告されていることから、今後、本研究における被験者の偏り、年齢、全身疾患を十分に補正する n 数が必要であると思う。また、フレイルの評価に関して、一般的に言われているように linear な状態ではなく、この評価法と歯周組織の状態を比較することに無理があったのかもしれない。さらなる研究の対象として他科の患者及び病院外の非通院患者、グループホームの居住者等について検討していく。</p>			